



Title	株価至上主義の破綻
Author(s)	濱田, 康行
Citation	農林経済, 10000, 1-1
Issue Date	2009-01-15
Doc URL	http://hdl.handle.net/2115/35501
Type	column (author version)
Note	巻頭言
File Information	hamada2.pdf



[Instructions for use](#)

株価至上主義の破綻

資本主義が歴史的にみれば短い期間に強大な経済社会を築けたのは、“目標がわかりやすく、しかもその目標が誰にでも実現できそうだったから”だろう。その目標を経済学では利潤率と呼ぶ。投下した元手（資本C）でどれだけの利潤（P）をあげたかを示す指標で、 $P' = \frac{P}{C}$ で示す。式は簡単だが含む意味は深い。資本を投下して回収する期間が短ければ、Pは何回も稼げる。利潤率は年率概念だから、スピードの早いつまり、回転のよい事業は儲かる。さらに、式を見ると、P'の値を大きくするには二つの方向があることがわかる。ひとつはP（分子）の増大で、これは至極まっとうな方向だ。経済学は、主流派も、マルクスも、この方向こそが当然と考えたようだ。マルクスは、資本家が労働者を搾取しPになるとした。主流派は搾取を否定し、Pは資本家の様々な創意工夫から生まれると主張する。意見はまさに対照的だが、同じなのは搾取も創意もモノづくりの現場ですなわら生産過程で行われるとしたことだ。

もうひとつは、Cを減らすという方向だ。これは式からは自明だが、経済学者には禁じ手と考えられていた。なぜならCは元手・資本であり、それをある程度持ってから事業を始めるのが現実的にも理論的にも前提だったからだ。現在の日本では、商法上たった一円の資本金でも事業を始められるのだが、こんな事はマルクスも他の経済学者もそれこそ夢想だにしなかったに違いない。

しかし、もし一円で100円稼げたら100倍、利潤率は1万%になる。経済学者が考えもしなかったこの方法は、いまや世界の金融界では常識となった。資本金は少ないけど大きな借金をし、合わせたお金を様々運用して利益をあげる。事が順調に進めば利益は動かしたお金の量に比例する。これを少ない資本金で割り算すると、高い一株当りの利益が算出される。それが高いと、この会社は儲かっていることになり、今度は高い株価がつく。破綻したリーマンブラザーズは資本金（剰余金を含む）と借金の比率が40倍もあった。彼らの動かしていた資金は日本円にして70兆円を超えるが資本金はわずかだった。株価が高くと、借金もしやすくなる。少ない株式数で巨額の資金も調達できるし、場合によっては他の会社の買収も一ドルの資金も必要としない。株式交換という方法を使うのだ。高株価というのは、高額紙幣を発行するのと同じだから一度やったらやめられない。

しかし、この株価至上主義が破綻した。経済活動の基本は生産現場にあって、搾取されているかどうかはともかく働く人がいて、生産の効率化を考え工夫し実践する経営者がいる。かくして生産物・商品が生み出され、それが商業の手で販売されてはじめて利益は生まれる。

農業に関係する多くの事業体は株価に関係のない世界にいる。一見、時代遅れのようにみえたが、それは幸いだったのではあるまいか。